

# 保育者養成課程に在籍する大学生の アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連 －施設実習経験のある大学生に関する検討－

Relationship between Ego-identity Status and Recognition of the Childcare Profession  
among University Students in a Nursery Teacher-training Course  
-A Case Study with Experience of Practicing Childcare in a Social Welfare Facility except for a Nursery School-

藤田 由起\*  
Yuki FUJITA

## Abstract

This study examined how the “ego-identity status” of university students in a nursery teacher-training course was related to their understanding, aptitude for the work, hope, and interest regarding childcare. Respondents who had experienced practicing childcare in a social welfare facility except for a nursery school answered the questionnaire about identity and the above-mentioned topics; the data indicated the following possibilities. First, most students were in “the middle of identity diffusion and moratorium status”, therefore practical training experiences were not always effective as opportunities to explore their identity. Second, students in “foreclosure status” had the most confidence and understanding of childcare, aptitude for childcare work, hope, and interest regarding childcare, compared to all other students. It is possible that they could have just superficially adapted in order to reach the goal for a childcare profession. And moreover, their practical training experience may not have led to deep reflection and may have only strengthened their awareness of the childcare profession without deliberation. Therefore, it was suggested that it was rather important to notice the conflicts behind their adaptation and to support them to find their own ideas about the childcare profession.

## I. 問題と目的

Erikson (1959) は、自立に向かう青年期における発達課題として、「アイデンティティの確立」を挙げている。「アイデンティティの確立」とは、田島ら (2016) によると、種々の役割実験を通して自分を正しく理解し、自分の中に存在する多くの側面を自我によって秩序づけ、統合することであり、「アイデンティティを確立することにより、青年は自分なりの考え方や価値観、生き方、人生観、人生目標をもち、自己の主体性、自立性、独自性を確立することができる」とされている。Marcia (1966) は、青年のアイデンティティ達成（確立）の程度について、「危機」の有無と「傾倒」の有無によって、4つのアイデンティティ・ステータスに分類した。田島ら (2016) によると、「危機」とは「その人にとって意味のあるいくつかの可能性について迷い、決定しようと苦闘した（している）時期」であり、「傾倒」とは「自分自身の信念を明確に表現したり、それにもとづいて行動したりすること」である。これらの2つの基準の有無によって、「アイデンティティ達成」、「早期完了」、「モラトリアム」、「アイデンティティ拡散」の4つの地位に分類される（表1）。Erikson (1959) は、一人前の社会人としての責任や義務が猶予された時期を「心理・社会的モラトリアム」と呼び、この時期に一人前になるための努力や修行を積み重ねることで、少しずつアイデンティティを確立していくと述べている。そして、大学生や専門学校生の時期にこのような心理・社会的モラトリアムの期間として様々な試行錯誤を重ね、アイデンティティの確立に向かうことが期待される。熊野 (2019) においては、心理・

\*1 くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

社会的モラトリアムの段階に「多くの低学年層の大学生が該当すると考えられる」と示されている。

なお、何らかの専門的な資格・免許の取得を目指すわけではない大学等に在籍する学生と比較して、専門職を養成する大学や専門学校に在籍する学生の場合、入学の前段階からある程度自身の進路や将来に関する展望を有して入学してきており、自身の価値観や生き方がある程度考えたうえで高等教育での学びを開始すると推察される。そして、保育者養成校においては、保育士資格や幼稚園教諭免許状取得に必要な科目を中心として履修し、「保育者」として働くことを前提としたカリキュラムに則って学習していくため、必然的に保育者としての自分の在り方や適性について見つめる機会を多く有していると考えられる。一方で、保育者養成課程に在籍する大学生のアイデンティティ・ステータスを調査した藤田（2023）の研究において、「同一性達成地位」および「積極的モラトリアム地位」に分類された大学生はごくわずかであり、多くの学生がアイデンティティ確立のための試行錯誤に本格的に取り組むことが出来ていない状態であると示唆された。しかしながら、藤田（2023）の研究で対象となったのは実習未経験の学生であり、実習経験を経て自身の生き方や強みについて見つめ直す作業が進むことも想像される。

実際に、保育者養成課程におけるアイデンティティの形成過程に関する先行研究は多く見受けられる。一方で、それらのほとんどはアイデンティティ全般ではなく「保育者アイデンティティ」の形成過程に焦点を当てている。「保育者アイデンティティ」とは、「保育者としての自己の確立であり、理想やモデルとなる保育者像と自分自身に対する理解を深め、それらを一致させていくことである」と定義されている（西坂・森下、2009）。そして、学生が保育者アイデンティティを形成する過程において、実習の果たす役割は大きいと考えられている（大野、2018）。例えば田爪（2013）は、「実習を通して望ましい保育者のモデルを獲得することと、保育に対して自信を身につけることが保育者アイデンティティの確立傾向の指標となり得る」と示唆している。このように、実習経験は今まで漠然と抱いていた保育者像を明確化することに大きく寄与し、それが保育者としてのアイデンティティ確立に繋がると考えられる。

一方で、「保育実習」には保育所での実習だけでなく、その他の児童福祉施設や障害者支援施設等での実習が含まれており、これらの実習間でも学生が受ける影響は異なると考えられる。保育士資格取得を目指す学生の大多数は、保育所で働くことをイメージしており、その他の施設で保育士として働くことをイメージしていない場合が多い（大和田ら、2014；多田内・重永、2014）。したがって、保育所以外の児童福祉施設や障害者支援施設をフィールドとした「施設実習」に対する不安を抱える学生も少なくない。野田（2015）は、施設実習では障害児者や要保護児童との関わりや、24時間を通じた生活支援が求められることなどから、実習を前にして学生にとって過度のストレスがかかりやすいと示唆している。このように、施設実習は学生が従来イメージしている保育士としての職場と異なる場において実施される上、精神的負荷もかかりやすい活動であることから、「なぜ保育士資格に施設実習が必要か」という確認から実習指導が始まることが多い（佐藤、2020）。一方で、施設実習を体験することで、学生の施設に対する意識や就職の希望に変化が生じることも示唆されている（多田内・重永、2014；土屋、2006）。このように、保育者養成校に入学した当初にイメージしていた保育所保育士とは別の保育士としての働き方を、実習を通して知ることが、自身がどのような保育者になりたいのか、どのような場で働きたいのか、自身が保育者として大切にしたいことは何か等を見つめ直すきっかけに成り得ると推察される。佐藤（2020）は、“普通”という枠組みに縛られた学生たちが、施設実習の中では学生がイメージする“普通”とは異なる背景や特性を持つ利用者と関わることでの困惑を経験すると述べている。そして、初めてのことばかりの実習体験の中で、「施設での保育士の役割とは何かという最も基本であり最も難しいことを具体的に体験することで学生たちは自身のアイデンティティを形成していくことにもつながると思われる」と述べている。さらに野田（2015）は、施設実習を終えた学生が、子ども観・保育者観に大きな変容があったことを示す発言や記述を残すことが多いことを示している。野田（2015）は、「このことは、施設実習場面での経験が学生にとって、自己の中の『何もできない弱い自分』や『少しは何かできるようになった自分』あるいは『保育者と

しての自分』と対峙する機会となり、そのことが個人のアイデンティティの再体制化あるいは保育者アイデンティティの形成に影響を及ぼしている結果の現れであることが推察できる事象である」と述べている。このように、施設実習は保育者を志す学生たちの中にあまりイメージされてこなかった働き方や、それを通じた自分自身の在り方に気付きを与える貴重な機会であり、学生たちのこれまでの価値観を変容させる機能をもっていると考えられる。しかしながら、これまで野田（2015）以外に施設実習とアイデンティティ形成の関連について焦点を当てた研究はほとんど見受けられない。したがって、施設実習という保育者を目指すうえで必ず通る課題が、学生らのアイデンティティの様相にどのように影響しているのか、詳細を探ることは有意義であると考えられる。

また、野田（2015）は、アイデンティティの中でも保育者アイデンティティに焦点を当てているが、実習経験は「保育者としての自分」だけにとどまらない、自己像全体にも影響を及ぼす可能性があるのではないかと推察される。西山ら（2007）は保育者養成校に通う学生について、同一性の感覚が保育職の理解や適性感に正の影響を与え、保育職の適性感が保育職で得られる充実感や満足感の予期や興味関心等に寄与していると示唆している。これらを踏まえると、実習経験が保育者への理解や適性感の伸長を促し、保育者アイデンティティを中核としたアイデンティティの形成が進むことで、保育職への理解がさらに進んだり、自身の保育職としての適性感を強く抱けるようになったりし、保育職で得られる充実感や満足感の予期や興味関心等に寄与するという良い循環のきっかけになっているのではないかと考えられる。

以上より、本研究においては、保育者養成課程に在籍する、施設実習を既に経験した大学生のアイデンティティの様相と保育職に対する認知の関連について知見を得ることを目的とする。アイデンティティの様相については、アイデンティティ・ステータスの考え方をを用いて、各学生がどの地位に属しているかを測り、アイデンティティ・ステータスと保育職に対する認知の関連について調査する。これを通して、施設実習経験が学生のアイデンティティ形成に及ぼす影響について考察すると共に、学生のアイデンティティ・ステータスに基づいた支援の在り方を検討する。

表1 アイデンティティ・ステータスの分類（田島ら（2016）及び加藤（1983）を基に作成）

	アイデンティティ達成 (同一性達成)	早期完了（権威受容）	モラトリアム (積極的モラトリアム)	アイデンティティ拡散 (同一性拡散)
危機	あり	なし	最中	あり または なし
傾倒	あり	あり	あるが、漠然としている	なし
特徴	過去に危機を経験し、 現在はその危機を克服 して選択した対象に傾倒 している。	過去に危機を経験して いないが、親や社会の 承認する対象を受け 入れ、現在その対象に 傾倒している。	現在、危機の最中で あり、傾倒は漠然として はっきりしていない。 明確な自己投入の対象を 主体的に獲得しようと して、現在危機のさなか で積極的な努力を行って いる。	過去の危機の有無に かかわらず、現在、傾倒 していない。

## II. 方法

### 1. 調査手続き

A大学の保育者養成課程に在学する大学2年生71名を対象とし、2023年9月に質問紙調査を実施した。

## 2. 倫理的配慮

本調査の回答は任意であり、研究以外には利用されないこと、回答拒否で不利益を被ることは一切ないことを説明したうえで実施した。

## 3. 調査内容

### (1) 同一性地位判定尺度

加藤（1983）の尺度を利用した。本尺度は、「現在の自己投入」、「過去の危機」、「将来の自己投入の希求」の3因子で構成されている。各因子の得点の高低により、①同一性達成地位、②権威受容地位、③同一性達成－権威受容中間地位（A-F 中間地位）、④積極的モラトリアム地位、⑤同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位（D-M中間地位）、⑥同一性拡散地位の6つのアイデンティティ・ステータスへの分類が可能である。具体的な分類の方法について、図1に示す。加藤（1983）に則り、「まったくその通りだ」から「全然そうではない」までの6件法で回答を求めた。

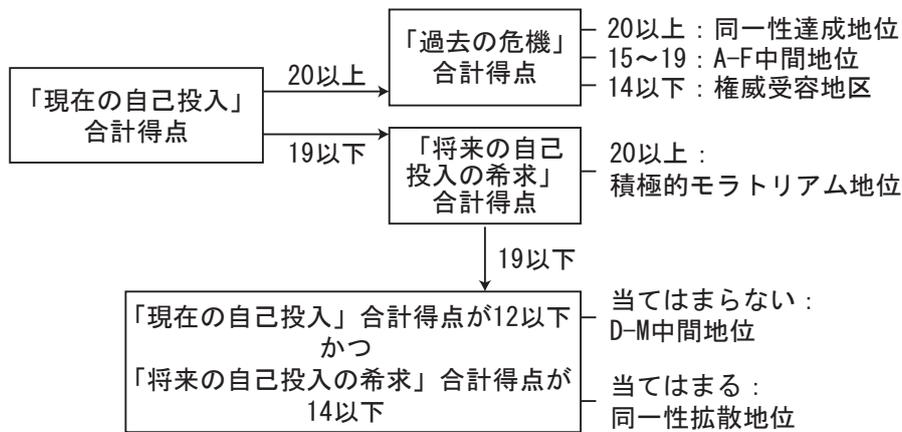


図1 各アイデンティティ・ステータスへの分類方法(加藤(1983)に基づき作成)

### (2) 保育職の理解

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業を、わたしは理解している」、「よき保育者になるために何をすればいいか理解している」の2項目を設定した。「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の7件法で回答を求めた。なお、以下に続く質問項目においても同様の7件法を用いた。

### (3) 保育職の適性感

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業は自分の適性に合っている」、「保育という職業で自分の能力を生かすことができる」の2項目を設定した。

### (4) 充実感・満足感の予期

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業で充実感を得るだろう」、「保育という職業で満足感を得るだろう」の2項目を設定した。

### (5) 関心・興味

西山ら（2007）を参考に、「保育という職業に関心がある」、「保育という職業に興味がある」の2項目を設定した。

#### 4. 統計解析

統計解析には、IBM SPSS Statistics Version23を使用した。具体的には、加藤（1983）の手法を基に調査対象者のアイデンティティ・ステータスの分類を行った後、各アイデンティティ・ステータスを独立変数、上記3「調査内容」のうち（2）～（5）の各合計得点を従属変数とする一要因分散分析を実施した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 調査対象者のアイデンティティ・ステータスについて

調査対象者71名のうち、61名から有効回答が得られた。

調査対象者のアイデンティティ・ステータスについて、同一性地位判定尺度の得点を基に分類を行った。その結果、「同一性達成地位」3名、「同一性達成－権威受容中間地位」3名、「権威受容地位」4名、「積極的モラトリアム地位」2名、「同一性拡散－積極的モラトリアム地位」43名、「同一性拡散地位」6名と分類された。

#### 2. アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について

1で分類したアイデンティティ・ステータスを独立変数、「保育職の理解」、「保育職の適性感」、「充実感・満足感の予期」、「関心・興味」の各合計得点をそれぞれ従属変数とした一要因分散分析を行った。その結果、全ての分析において有意差が見受けられた（それぞれ $F(5,55) = 2.95, p < .05$ ;  $F(5,55) = 6.77, p < .001$ ;  $F(5,55) = 5.20, p < .001$ ;  $F(5,55) = 3.62, p < .01$ ）。

「保育職の理解」合計得点を従属変数とした場合、「権威受容地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。

「保育職の適性感」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成－権威受容中間地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高く（ $p < .05$ ）、「権威受容地位」群が「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群及び「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（それぞれ $p < .01, p < .001$ ）。

「充実感・満足感の予期」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成－権威受容中間地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高く（ $p < .01$ ）、「権威受容地位」群が「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群及び「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（それぞれ $p < .01, p < .001$ ）。

最後に、「関心・興味」合計得点を従属変数とした場合、「同一性達成地位」群、「同一性達成－権威受容中間地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高い傾向が見受けられた（どちらも $p < .10$ ）。また、「権威受容地位」群が「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高かった（ $p < .05$ ）。各分析結果を表2に示す。

表2 各アイデンティティ・ステータス群の各保育職の認知合計得点及び分散分析結果

	同一性達成地位 (N=3)	同一性達成－ 権威受容中間地位 (N=3)	権威受容地位 (N=4)	積極的 モラトリアム地位 (N=2)	同一性拡散－ 積極的モラトリアム 中間地位 (N=43)	同一性拡散地位 (N=6)	F値
保育職の理解	10.00 (0.00)	11.00 (1.73)	11.75 (2.06)	9.50 (0.71)	9.79 (1.04)	8.33 (3.39)	2.95*
保育職の適性感	10.00 (1.73)	11.00 (1.00)	12.25 (1.71)	9.50 (2.12)	9.19 (1.31)	7.50 (1.51)	6.77***
充実感・満足感の予期	10.67 (1.15)	11.33 (1.15)	12.50 (1.91)	11.00 (1.41)	9.74 (1.50)	8.17 (1.17)	5.20***
関心・興味	12.67 (1.15)	12.67 (1.15)	13.00 (1.15)	12.00 (2.83)	11.00 (1.50)	9.67 (1.97)	3.62**

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ .

( )内は標準偏差。

## IV. 考察

### 1. 調査対象者のアイデンティティ・ステイタスについて

本研究においては、6つのアイデンティティ・ステイタスに調査対象者を分類した。本研究は、施設実習を経験した学生を対象としていたが、実習未経験の学生を対象とした藤田（2023）とさほど変わらない人数の比率を示していた。まず、青年期の望ましい到達点とされる「同一性達成地位」に分類されたのは、全61名中3名とわずかであった。上述したように、大学低学年層の時期はアイデンティティを確立するための準備期間としての心理・社会的モラトリアムに当たると考えられることが多い。また、実習を受けて、自身の職業観や強みについての問い直しが生じやすい状態にあると推察される。したがって、「同一性達成地位」に分類される対象者が少なかった本研究の結果は、むしろ自然な結果であるとも考えられる。一方で、「積極的モラトリアム地位」に分類された調査対象者についてもわずか2名であり、「アイデンティティの確立のために努力している」という自信が持てる学生がごく少数であると考えられた。そして、全61名中43名の学生が「同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位」群に分類されていたことから、自分自身の信念が現時点では曖昧であり、自身が持つ可能性について多様な視点で考えたり、可能性を見出すための努力を行ったりすることが本格的にはできていない段階の学生が多いと考えられた。すなわち、施設実習を体験したからと言って、すぐに積極的な試行錯誤が開始されたり、アイデンティティの確立に直結したりするわけではないと考えられた。

一方で、西田ら（2011）は、本研究で使用した加藤（1983）の同一性地位判定尺度を用いた先行研究の多くはD-M中間地位に分類されると指摘している。このような傾向について、伊藤（2002）など多くの研究では、アイデンティティ確立が未発達傾向にあると捉えられてきたが、本尺度の妥当性を検討した吉中（2016）の研究においては、早期完了（権威受容）地位に該当するであろう特徴を持つ人々が実際には同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位に分類されていること、同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位は複数の性質の異なる群の混合であることが示唆されている。また、西田ら（2011）は、本尺度で言う同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位は、複数のアイデンティティが緩やかに束ねられているような、「仮面性を意識した多元的自己意識」だと捉えることができると指摘している。これらの先行研究を踏まえると、「同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位」群を純粋に自身の迷いを克服するための努力が十分にはできていない段階と捉える見方と、この群に分類されているとしても危機及び傾倒が必ずしも不十分であるとは言えず、本人なりに傾倒する対象を有していたり、種々の社会役割に合わせたアイデンティティを形成しつつあったりすると捉える見方が可能である。したがって、これ以降は両方の可能性を視野に入れたうえで考察を行っていく。

まず、「同一性拡散-積極的モラトリアム中間地位」群を純粋にまだ十分な試行錯誤ができていない段階と捉えた場合、この群に分類された対象者が多くなった理由として、以下のようなことが考えられた。

先述したように、実習経験は学生のアイデンティティ形成に大きな影響を及ぼすと推察されるが、施設実習についても、学生の価値観を揺るがす体験であると考えられる。実際に松藤・中村（2016）の研究においては、94%の学生が実習を経て施設へのイメージが肯定的に変化し、50%の学生が施設も就職先の一つとして視野に入れるようになったことが示されている。このように、施設実習体験が学生の考え方や価値観の肯定的な変容をもたらすことは多くの研究で示唆されている。一方で大野（2018）は、保育者養成課程において、1回目の実習で6割の学生が「自分の職業に対して向上心を持って臨む人が、職場の現実と自らの職業的な理想や価値との間に生じるズレによって、うまくいかない、あるいは成果が得られないと感じたときの反応」（Kramer, 1974）である「リアリティ・ショック」を経験することを示唆している。谷川（2010）によると、「リアリティ・ショックはネガティブに影響するか、ポジティブに影響するかによって用いられる文脈が異なる、両義性を有する概念」である。実際に我が国では新卒社会人の職場への不適應や早期離職を招く要因として注目されることが多い一方で、リアリティ・ショックが自己発見をもたらしたり、仕事への期待感を高めたりするポジティブな側面を有していることも示唆されている（谷川、2010；Kramer, 1974）。これを踏まえると、

実習体験は学生のアイデンティティ形成過程において肯定的・否定的両方の意味でターニングポイントとなり得ると考えられるが、谷川（2010）は、幼稚園教育実習に臨んだ学生がリアリティ・ショックを経験した際、「子どもの理解の発展」というプロセスを経る場合と、「ショックからの回避」というプロセスを経る場合があると指摘している。すなわち、実習でのリアリティ・ショックは学生の価値観の見つめ直しを促進する場合もあれば、学生が実習経験を自身の価値観や将来と紐づけて考えようとすることを抑制する場合もあると考えられる。したがって、全ての対象者にとって実習経験が自己の見つめ直しに繋がる肯定的な体験となったわけではない可能性があり、多くの対象者のアイデンティティ・ステータスが低い地位に留まったと推察される。

さらに、本研究の対象者は、所属学科のカリキュラム内にある施設実習、保育所実習、幼稚園教育実習のうち、施設実習のみを体験している段階にあったということも、多くの対象者のアイデンティティ・ステータスが低く示された背景にあると考えられる。対象者のこのような状態は、まだ保育者としての役割や実際について一部分しか目の当たりにしていない状態であると考えられる。アイデンティティを模索する過程においては、様々な考えに触れ、試行錯誤しながら自身の考えや価値観をまとめあげていくことが求められるが、本研究の対象者らは、「施設での保育者の役割ややりがい」という、保育者の一部にしか触れることができず、まだ自身の生き方や価値観を問い直すための十分な材料をもっていない状態であると推察される。したがって、本研究においては比較的アイデンティティ・ステータスが低い段階にある対象者が多くなった可能性が考えられる。また、「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群は、現在「傾倒」はかなり漠然としている状態であるが、「傾倒」できる対象を見つけるために、「危機」の中でもがき始めようとしている段階、すなわちこれから自身の信念を明確にするために、試行錯誤を始めようとしている段階であるとも考えることができる。したがって、現在「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群に位置する対象者が多いことは、自身が志す職業に関連する体験を開始したばかりの段階であることを踏まえると自然な結果とも捉えられる。これと関連して矢野（2011）は、施設実習を経験した大多数の学生が施設実習の意義を感じているものの、障害についての事前学習や、福祉的支援を要する子ども達への支援方法についての事前学習を必要と感じていることを示している。実際に実習施設を利用する方の障害種や背景、支援方法は多様であり、学生が実習先で初めて授業内では学んだことがない概念に出会うことも少なくない。このことを踏まえると、学生が実習先での学びを十分に自分のものにし、自分の価値観や考え方に結びつけていくことができるように、実習指導を担当する大学教員側も、各実習施設の実態について可能な限り把握し、実態に基づいた指導を実施することで、学生の実習中の学びがより深まり、自己探求にも結び付きやすくなると推察された。

また、本研究の対象者は4年制大学の2年生であり、卒業や就職をまだあまり意識していない段階であるとも推察される。多くの学生は、卒業や就職が近づくにつれ、自身がどのように生きていきたいのかについて本格的に考え出すと考えられる。このことを踏まえると、大学2年生である対象者たちの中には、アイデンティティを模索することの必要性をまだあまり感じ取っていない段階の学生も少なくなく、今後そのような試行錯誤が開始される可能性があると考えられる。一方で小此木（1977）は、Erikson（1959）が提唱してきた心理・社会的モラトリアムには自立への渴望や自己探求などの特徴があるのに対して、日本の青年におけるモラトリアム心理には、それらとは異なる全能感やしらけ、遊び感覚などの特徴があると述べている。本研究で「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群に分類された学生の中にも、自己探求への意識よりも目先の楽しさを重視している者も存在すると考えられる。実際に小藺江（2014）は、保育者養成の現場において、できるだけ楽をしたいという学生の本心が見えることも少なくないと述べており、本来であれば自己研鑽や様々な挑戦に充てられるべき心理・社会的モラトリアムの期間が形骸化している学生も少なくないと考えられる。

以上のように、「同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位」群の中にも、模索を始めたが何にどのように挑戦すればよいか明確ではなく、これから試行錯誤する場や対象を定めていこうとしている段階の者、試行錯誤の必要性を現時点では十分に感じ取っておらず、就職に向けた活動を契機に試

行錯誤を本格的に開始する可能性のある者、目先の楽しさを優先的に考えている者等、様々な者が存在すると考えられる。したがって、彼らがアイデンティティを模索する作業に対してどのような認識を持っているのか、今の生活の中で重要視していることは何なのかなどを探り、個々の状態に合わせて支援していくことが必要と考えられる。これから積極的に様々な物事に挑戦して試行錯誤を経験しようとしている者に対しては、その学生が現時点で思い描いている生き方を現実的に考えるために必要・有効だと思われる体験の場を提示・紹介すること、大学生活の後半に差し掛かってから試行錯誤を始めようとしている者に対しては、早い段階から様々な経験の機会をもったり、自身の生き方について考えたりすることの有効性を伝えていくこと、目先の楽しさばかりを重視している者に対しては、まず自身の生き方や価値観に目を向けるきっかけを作ることが有効と考えられる。特に目先の楽しさばかりを重視して大学生活を送ることがないよう、学生に対して入学時から今後学ぶことや自身の納得のいく道を探すために必要な事項について見通しを持たせ、「入学＝ゴール」とならないようにすることが必要である。そのためには、適宜自身の取り組みについて振り返り、修正していく作業を促すことが重要だと考えられる。また、自身のアイデンティティについて考えるうえで、他者の考えや価値観を知り、自身の考えや価値観と比較したり、見直したりすることは重要であると考えられる。したがって、惰性で個々に経験したことを振り返らせるだけではなく、自身が経験したことから気づいた自分の強みや価値観についても考えを促したり、振り返った内容を他者と共有したりする機会を設けることも重要であると考えられた。

次に、「同一性拡散－積極的モラトリアム地位」群に分類されているとしても危機及び傾倒が必ずしも不十分であるとは言えず、本人なりに傾倒する対象を有していたり、種々の社会役割に合わせたアイデンティティを形成しつつあったりすると捉える見方に沿って考察していく。先述の通り、本来「権威受容地位」群に分類されるべき対象者についても本群に分類されやすいということは吉中（2016）によって指摘されている。そして、保育者養成課程をはじめとした専門職を養成する課程に進学してくる大学生らは、進学の段階から肯定的・否定的両方の意味で「保育職に就く」ということに固執しやすいと考えられる。無藤（1979）は、早期完了（権威受容）地位について「どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている」、「硬さ（融通のきかなさ）が特徴的」と表現している。したがって、「同一性拡散－積極的モラトリアム地位」群≡「権威受容地位」群だと考えると、施設実習体験はもともと有している「保育職に就く」という信念を補強するだけの体験に留まっておき、それ以上の迷いや試行錯誤のきっかけとしては機能しなかった可能性も考えられた。また、実習の中で漠然と感じた不安や迷いが自身の従来目標に向かう足かせとならないように、それらを無意識のうちに抑圧してしまっている可能性も推察される。実際に熊野（2019）は、権威受容地位の青年について、自身が置かれた現状に対して「すでに決まったもの、決められたものとして、受け入れる・従うという態勢しかなく、内的に存在しているはずの疑問や違和感には、まったくと言ってよいほど目が向けられていないように感じられる」と述べている。したがって、不安や迷いと向き合い、解決のために努力することの有用性を示したり、実習生を指導する立場の教員が、彼らの語りや文章の中から見出された迷いや不安を拾い上げ、支持的にそれらについて共に考えていたりしていくことが、学生の成長に繋がると考えられた。

さらに、先述のように「同一性拡散－積極的モラトリアム地位」群には様々な特徴を有する者が混在している可能性が指摘されている（吉中、2016）。したがって、アイデンティティ・ステータスにとらわれすぎず、一人ひとりの内的な状態を把握し関わろうとする姿勢も彼らのアイデンティティ確立への支援において大切と考えられた。

## 2. アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について

次に、アイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連について考察していく。まず、各群の保育職への認知得点を概観して、「権威受容地位」群の各得点が他の群に比べて最も高く、「同一性達成－権威受容中間地位」群、「同一性達成地位」群と続く形であった。そして、各分散分析結果を

概観すると、全ての分析において「権威受容地位」群が「同一性拡散地位」群のみ、もしくは「同一性拡散地位」群及び「同一性拡散－積極的モラトリウム中間地位」群の両方よりも有意に得点が高かった。また、「同一性達成地位」群については「関心・興味」合計得点を従属変数とした場合に「同一性拡散地位」群よりも有意に得点が高い傾向が見受けられたのみで、その他の有意差や有意傾向は見受けられなかった。さらに、「積極的モラトリウム地位」群については他の群と比較して有意差や有意傾向は見受けられなかった。このように、アイデンティティを達成していたり、心理社会的モラトリウムの最中にいたりする場合よりもむしろ、他者の承認する対象を受け入れ、それに傾倒している場合の方が、保育職への肯定的な認知が高いということが本研究結果の大きな特徴として考えられた。藤田（2023）においても、「危機」を経験していない「権威受容地位」群が、「危機」の最中である「積極的モラトリウム地位」群と比較して全体的に保育職への認知が肯定的であるという結果が示されている。これらのことから、保育者養成課程に在籍する学生が、保育職への肯定的な認知を持って学び続けるためには、必ずしも「危機」の経験は必要な条件にならないと推察される。保育者養成課程に在籍する学生の中には、「親や親戚が保育者である」という者も一定数見受けられる。他にも、専門的資格を取得することを親や自分自身が望み、その中で保育という選択肢を選んで入学している者もいる。このように、専門職を養成する学部・学科に所属する場合、そうでない学部・学科に所属する場合よりも、他者の意向を受けて形成された目標や「資格取得」という目標が先行し、「危機」の必要性が生じない場合があり、そのような目標が自身に違和感なく受け入れられていれば、保育者への肯定的な認知を持って学びに向かうことができると示唆された。

一方で、早期完了（権威受容）型アイデンティティに関する研究を概観した熊野（2019）は、この型に分類される青年は、あくまで表面的な適応を示しており、それが維持できなくなった場合、アイデンティティ拡散状態に陥る可能性を指摘している。熊野（2019）は、権威受容型の青年は「社会的承認への欲求が強い」、「自己主張的な態度が少ない」、「同調行動が多い」、「心理的離乳の解決が不十分」、「依存的な意思決定のスタイルを持つ」といった特徴を有しており、「自ら考えて決定する、という内省を伴う自律の面の未熟さとともに、分析力や深い考察力に乏しい」と述べている。そして、「周りの基準で思考・判断しているにも関わらず、そのことへの内省に乏しく、自己評価が高い水準で保たれているという点が、早期完了の一応の適応状態につながっており、臨床場面では取り上げられる対象となりにくい要因」と述べている。これらを踏まえると、一見本研究の結果は「権威受容地位」群が保育職に向かうために必要な適性感や興味関心等を強く認識しており、自身の目標に向かって適応的に発達しているように見えるが、むしろ深く内省することを避け、周りの期待や考えに合わせて適応しようとした結果であるとも考えることができる。本研究は施設実習を終えた学生を対象として実施されたが、施設側からの評価と学生の自己評価にギャップがある場合も少なくない。具体的には、施設側からは「より深い考察をしてほしい」「自らの考えをもっと日誌にまとめてほしい」という評価を受けるのに対して、学生本人はそのような課題意識をあまり持っていないという場合などがある。このような点からも、学生が施設実習後に「よい学びの機会となった」と考えたり意見を述べたりしていたとしても、深い内省をするまでには至っていない可能性があると考えられる。そして、そのような学生たちは、自身の中で経験された違和感や不安に気づくことなく、保育職への肯定的な認知のみを増強する体験として彼らの中に蓄積されることで、ますます表面的な適応のみを強めていくという可能性も推察される。したがって、「権威受容地位」群を保育職を目指すうえでの望ましい発達の在り方と短絡的に考えず、彼らの表面的な保育職への適応の背景にあり、かつ抑圧されている葛藤等に目を向け、支援していくことが必要と考えられた。杉原（2001）は、早期完了（権威受容）の段階からモラトリウムの段階へ移行するためには、「親への同一化を継続させている要因について理解し、その要因の作用を弱める介入」および「一面的なものの見方において切り捨てられているものへの焦点づけ」を挙げている。筆者自身も、希望進路やそれに付随する考えについて大学生と話す際、親の意向が真っ先に希望進路の根拠として拳がったり、学生自身から出てくる考えが表面的で浅いものに留まっていると感じたりする場合も少なくないと感じている。表面的な適応を自ら保つことができる

ことは肯定的な側面とも捉えうるが、保育職として働き始めた後に何らかのきっかけでその状態が崩れてしまう可能性もあると考えられる。したがって、杉原（2001）が示しているように、学生の表面的な適応の背景に目を向け、主体的な意思決定や、他者の考えに惑わされない自身の考えの確立を支えていくことも、保育者養成課程の学生を支援する上で必要な視点であると考えられた。

また、Erikson（1959）は「青年期の発達課題は自我同一性の確立であり、その中心的な要素は職業決定である」と述べている。このことから、本研究で示された各対象者のアイデンティティ・ステータスは、彼らの保育職という職業への確信が大きく反映されていると推察される。さらに、西山ら（2007）は、「同一性の感覚」を始発として「保育職の適性感」に繋がり、そこからさらに「充実感・満足感の予期」及び「関心・興味」に繋がるというように因果連鎖していくこと、反対に「同一性の感覚」が低い場合、保育職への適性感が低くなり、将来の職業生活に対して充実感や満足感を予期することも難しくなるため、結果として関心や興味も低くなるといった、悪循環を引き起こすことを示唆している。本研究においては「同一性達成地位」群や「積極的モラトリアム地位」群よりもむしろ「権威受容地位」群の方が各保育職への認知得点が高く、他の群との有意差も見受けられた一方で、アイデンティティ・ステータスが低い次元であるほど、保育職への肯定的な認知が持ちづらいことが示唆された。この結果は上述の通り、「権威受容地位」群の表面的な適応の高さも影響していると考えられるが、アイデンティティの確立が進んでいないほど職業への確信は弱いという点はErikson（1959）が示していることと一致している。これらをまとめると、保育者養成課程の学生が卒業後に希望を持って保育者として継続的に勤務することができるようにするためには、保育に関する知識や経験を、自身の財産として積むことができる機会を4年間の中で多く準備することは勿論、「保育者としての自分」にも繋がるが、それだけではない自身のアイデンティティ全体にも関わる自分自身の特性や信念について考える機会についても設けることが大切と考えられた。さらに、そのような機会を設けたとしても、表面的な適応に流れてしまう可能性も否めないため、学生と対話を重ねながら、無意識のうちに抑圧している疑問や違和感とも対峙する作業を支えていくことが、学生が本来の意味で適応的に、自身の目標に向かって努力を積み重ねることに繋がると考えられた。

本研究では施設実習後の61名の学生のアイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連性について検討したが、実習経験を自己理解や自己探索にまで繋げていくためには、ただ実習を経験させるだけではなく、その経験から得られた学生の主体的な思いや考えを拾い上げ、否定的な思いも含めて見つめ直す作業を後押しすることが重要であると考えられた。

## V. 引用文献

- Erikson, E.H. (1959) Psychological Issues Identity and Life cycle . International Universities Press, Inc. 西平直・中島由恵訳 (2011) アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房. ; (小此木啓吾訳編 (1973) 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル. 誠信書房.)
- 藤田由起 (2023) 保育者養成課程に在籍する大学生のアイデンティティ・ステータスと保育職への認知の関連—実習未経験の大学生に関する検討—. くらしき作陽大学・作陽短期大学研究紀要、55 (2)、61-69.
- 伊藤敦美 (2002) 青年期の自己同一性に関する研究—職業選択と学業意識の視点から—. 現代社会文化研究、25、231-247.
- 加藤厚 (1983) 大学生における同一性の諸相とその構造. 教育心理学研究、31 (4)、20-30.
- 熊野みき (2019) 早期完了型アイデンティティに関する研究の動向と展望. 松山大学論集、31 (4)、59-77.
- 小泉裕子・田爪宏二 (2005) 実習生の保育者アイデンティティの形成過程についての実証的研究—保育者モデルの影響と保育者アイデンティティ「私は保育者になる」の関連—. 鎌倉女子大学紀要、12、13-23.
- Kramer, M. (1974) Reality Shock: Why Nurses Leave Nursing. Saint Louis: C.V. Mosby Co. vii-viii.

- Marcia, J.E. (1966) Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personal and Social Psychology*, 2, 551-558.
- 松藤光生・中村恭子 (2016) 施設実習における実習施設種による学びの差異. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、48、65-71.
- 無藤清子 (1979) 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性. *教育心理学研究*、27 (3)、178-187.
- 西田若葉・沖林洋平・大石英史 (2011) 大学生の多元的アイデンティティと適応機能の関連. *山口大学教育学部研究論叢 芸術・体育・教育・心理*、61、81-92.
- 西山修・富田昌平・田爪宏二 (2007) 保育者養成校に通う学生のアイデンティティと職業認知の構造. *発達心理学研究*、18 (3)、196-205.
- 西坂小百合・森下葉子 (2009) 保育者アイデンティティの形成過程－保育実践経験5～10年の幼稚園教諭に対するインタビュー調査から. *立教女学院短期大学紀要*、41、51-60.
- 野田敦史 (2015) 医療型障害児入所施設実習での経験が保育者アイデンティティに及ぼす影響. *未来の保育と教育－東京未来大学保育・教職センター紀要*、2、37-44.
- 小此木圭吾 (1977) モラトリアム人間の時代. 中央公論社.
- 大野和男 (2018) 進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック. *鎌倉女子大学紀要*、25、34-48.
- 大和田明見・関根美保子・鈴木春江 (2014) 保育士養成課程における施設実習の意味と意識の変化. *帝京大学教育学部紀要*、2、275-284.
- 多田内幸子・重永茂 (2014) 施設実習の前後での本学幼児教育学科学生の意識調査. *久留米信愛女学院短期大学研究紀要*、37、69-76.
- 小藺江幸子 (2014) 保育実習が学生の自己効力感に与える影響－実習回数の違いによる自己効力感の特徴－. *淑徳短期大学研究紀要*、53、97-112.
- 田爪宏二 (2013) 保育実習の進行に伴う大学生の保育実習の印象および就業意識の変化－「保育者アイデンティティ」の確立の視点からの検討－. *鹿児島国際大学福祉社会学部論集*、31 (4)、13-28.
- 土屋由美子 (2006) 施設実習に関する意欲と現状についてⅡ－学生のアンケートを中心に－. *中国学園紀要*、4、85-90.
- 佐藤由紀子 (2020) 保育士養成校における施設実習の効果についての一考察. *信州豊南短期大学紀要*、37、23-50.
- 杉原保史 (2001) 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について. *心理臨床学研究*、19 (3)、266-277.
- 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) (2016) 新・発達心理学ハンドブック. 福村出版.
- 谷川夏実 (2010) 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容. *保育学研究*、48 (2)、96-106.
- 矢野洋子 (2011) 保育士養成における施設実習の意義と事前指導に関する検討. *九州女子大学紀要*、48 (1)、129-138.
- 吉中敦 (2016) 大学生における自我同一性地位と進路成熟態度の関連. *弘前大学教育学部紀要*、116 (2)、67-75.

備考：本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

